

「ジュニア夢カレッジ2」企画メンバー座談会  
「学生時代の多様な大人との出会い」学生と大人が  
共にイベントの企画・立案をする価値って？

長江曜子 有川かおり 池田美咲  
佐々木真歩 渡辺梨紗子 今泉優香

座談会参加者プロフィール

■長江 曜子（児童学部児童学科教授、生涯学習研究所所長）  
明治大学大学院博士後期課程修了、共立女子大学大学院人間  
生活学専攻博士後期課程修了（学術博士）

日本近現代文学が専門で「宗教と文学」を研究。後に、日本と  
世界の葬送文化研究を通して、少子高齢社会の研究をするなど、  
研究の範囲を広げている。

■有川 かおり（生涯学習研究所助手）

立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科博士前期課程  
修了（社会デザイン学修士）

「昭和の縁側のような、人と人が緩やかに繋がる社会の形  
成」を目指し、研究と実践の両面からアプローチをしている。  
研究キーワード：地域社会、ネットワーキング、まち  
づくり

■池田 美咲（児童学部児童学科 4 年）

本企画の学生リーダー（昨年度から参画）。関心分野は社  
会心理学で、現在「性格特性と作り笑いについて」の卒業  
論文を執筆中。生涯学習研究同好会（りりーず）で仲間と  
共によさこいソーランを踊ることに夢中。

■佐々木 真歩（文学部文学科 3 年）

本企画の学生副リーダー（昨年度から参画）。幼少期から  
の夢である「図書館司書」になるため勉強中。図書館が他  
の生涯学習施設と連携し、学びの好循環を創る拠点の一つ  
になれば良いと思っている。本企画で、社会連携の方法論  
を学びたい。

■渡辺 梨紗子（文学部文学科 3 年）

本企画の学生副リーダー（昨年度から参画）。関心分野は、  
日本古典文学（特に中古文学）。「地域の特性と社会教育事  
業の関連性」に興味がある。本企画で、サポートして下さ  
る松戸の方々と関わることで、住民の生の声を聴きたい。

■今泉 優香（短期大学部総合文化学科 1 年）

今年度から参画しているメンバー。将来は漠然と「人のた  
めになる仕事」がしたいと思っている。今回の企画では「そ  
もそも人のためとは？」という、本質に向き合ってみたい。  
趣味は読書で「有川浩さん」「上橋奈穂子さん」の作品が  
好き。

長 江：今日は、集まってくれてありがとうございます。  
「ジュニア夢カレッジ」は昨年から行われていま  
すが、今日集まってくれたメンバーの中には、今  
年も引き続き関わっていただいている方、あるい  
は初めて関わる方もいらっしゃると思います。そ  
こで、初めの質問をしたいと思います。「ジュニ  
ア夢カレッジ」に関わった動機はなんですか？

池 田：私は昨年から参加させていただいていますが、  
きっかけは、昨年の学生リーダーから誘いを受け  
たことでした。

長 江：誘われたんですね。しかし、誘われてもなかなか  
足が動かないと思います？

池 田：それは、昨年の学生リーダーの口がうまかったか  
らだと思います。すごく楽しそうにも見えたので。  
「子どもたちと関わるイベントだよ」と言われ、  
初期のメンバーで入りました。

長 江：佐々木さんはどうですか？

佐々木：私は、今年の学生リーダーから誘われたことが  
きっかけでした。そういったイベントがあるとい  
うことを聞いて、試しにやってみようと思いま  
した。関わってみたら、先輩達が優しくて、楽し  
そうに活動していました。

私はもともと人見知りなので、今まで、自分の小  
さな周りでしか動いてきませんでした。そういう  
自分を変えたいと思ったことも一つのきっかけで  
すし、大学で「生涯学習」について学んでいく中  
で、子ども向けのイベントの企画・立案に関わ  
ってみたいと思ったこともきっかけの一つでした。

長 江：そうですね。キーワードは「一歩踏み出す」とい  
うことですね。意外となかなか一歩を踏み出すこ  
とは難しいことですね。そこの誘い方が上手だ  
たのね。

佐々木：「やってみよう！」ってすぐになりました。

渡 辺：私も昨年から参加しているのですが、昨年は授業  
の一環として関わりはじめたことがきっかけで  
した。昨年のイベント終了後、保護者のアンケート  
を読んで、「こういう企画をしてくれてよかった」  
というコメントが書かれているのを見まし  
た。企画・立案している時には気が付きません  
でしたが、「ジュニア夢カレッジ」のようなキャ  
リア教育イベントは、とてもニーズが高いものだ  
ということに気が付きました。

今年は、今の学生リーダーからお誘いを受けま  
した。今年関わったきっかけは、昨年の結果を受け

て、地域に必要とされていることに関わりた  
と思ったからです。

長 江：今泉さんはどうですか？

今 泉：私は、今年から参加させていただいて  
いるのですが、きっかけは、「生涯学習」の授  
業でした。授業の中で、今の学生リーダーと  
副リーダーが、このイベントのことをお話  
していただきました。「先輩と関わる機会  
ってあまりないな」と私自身思っていたので、  
この企画を通して、他の先輩方とお話する  
ことや、子ども達と関われば良いなと思っ  
たのがきっかけですね。

長 江：学生一人一人が主体的に関わることは  
すごいです。その主体的に関わる方々が集  
まる場づくりを、生涯学習研究所が担っ  
ていますが、有川さんの立場から、実際  
に関わっている人達の人数や、その人達  
が、どんなきっかけで関わっているのか  
教えていただけますか？

有 川：今、聖徳大学以外の学生も含め39  
名がこの企画に関わっています。関わる  
きっかけは、学生同士の口コミが多いと  
感じています。

口コミで集まってくる学生以外は、「何か  
チャレンジしてみたい」と思っている学  
生一人一人と話をして、「一緒にやってみ  
ようよ！」と声をかけてメンバーを増や  
しました。

長 江：「関わる人集め」っていうのが大  
変難しいということですね。

『ジュニア夢カレッジ』っていうのは、  
なんとなく、『ワクワクドキドキ楽し  
そう』という思いが伝わるような企画  
でもあるのですかね。

有 川：自分たちが、小中学生の時に  
職業体験を体験したことが、学生達  
の記憶に残っていて、「自分達も楽し  
かったから同じように企画を立てて  
みたい」といった話を聞いたことも  
あります。

長 江：実際に企画を立てる上で、みんな  
の意見がまとまらない等の苦労はあ  
りますか？

池 田：本番2か月前でも、意見がた  
くさん出てまとめるのは少し大変  
です。ですが、学生や立場を越えて  
議論することは、すごく楽しいです。

守られているうちにこういう経験さ  
せていただけるというのがあまり  
ないので、苦労より楽しさの方が  
大きいです。

長 江：渡辺さんは、企画を立てる  
上で、「子ども達にこんな体験を  
させてあげたい」等、何か工夫  
をしている点はありますか？

渡 辺：私が今年関わりだした時には、  
すでに1日開催になることや、おおよそ  
行われる職業が決まっていたので、  
あまり企画段階からは関われませ  
んでした。しかし、昨年のアンケート  
にあった「人の流れの悪さ」「時間  
の流れの悪さ」等、改善しなければ  
いけない部分を解決し、昨年より  
良いものを作りたいです。

長 江：「昨年よりもっとバージョン  
アップしたい」「地域から求めら  
れている」等、アンケートからの  
意見を吸い上げ、つなげていくの  
は良いことですね。今泉さんは  
どうですか？はじめて参加して、  
イベントができていく中での気  
付きや発見はありますか？

今 泉：私は、途中から関わった  
ので、ほとんど内容が決まってい  
ました。でも、そこに至るまでの  
内容を、学生と一緒に決めてい  
ることを知って、ビックリしま  
した。今まで私が関わってきた  
ものは、先生のおぜん立てがあ  
りました。でも、この企画は、  
先生方の後ろ盾のもと、学生  
が企画しているので素直にす  
ごいと思うし、学びも多いと思  
います。

長 江：個人的に今泉さんが、実際  
に体験したい職業はこれの中に  
ありますか？

今 泉：私がやってみたいと思  
った職業は、「管理栄養士」と「  
鉄道職員」ですね。種類がバラ  
バラですが、栄養面や交通手段  
として普段使っているもので  
あり、自分も学んだら、これ  
から活かせると思ったので選  
ばせていただきました。

長 江：なるほど。佐々木さんは  
どうですか？実際に企画に参  
加していかがですか？

佐々木：昨年参加した時は、イ  
ベントのお手伝いしかできま  
せませんでした。確か、職業ご  
との学生の割り当てや、打ち  
合わせもほぼ進んでいる後半  
から関わったと記憶しています。

今年は、昨年より少し早めに  
参加し、昨年あった反省を踏  
まえて、全体会議でたくさんの  
議論を重ねました。中でも、開  
会式の流れの改善に力を入れ  
ました。議論を重ねていく中  
で、「今回は、昨年よりも良い  
講座ができるな」と改めて感  
じました。

長 江：実際、授業やアルバイト  
等の予定があつて忙しい中、  
みんなが集まるだけでも大変  
なのに、どうやって時間を作  
っていますか？

池 田：『LINE』というコミュニ  
ケーションアプリで、会議の出  
欠確認を行っています。しか  
し、やはりすぐに回答する人  
って結構少ないです。恐らく、ア

アルバイトや授業でこられないのだと思います。会議の時間を放課後にする等、なるべく集まりやすいよう、工夫はしていますが、どうしても、いつも出てこられる人と、そうでない人との差は出てきてしまいます。

有川：でも、池田さんは欠席した人達に対して、「会議の振り返りをするので、欠席した人は来てください。この時間、私は研究所にいます」とフォローをしていますよね？そこが、池田さんのすごいところだなと思います。

渡辺：『LINE』に、会議で話し合われた内容をその日にまとめ、全員が見られるノートにまとめてくれているのも、すごいところですよ。

長江：議事録ね。振り返りがちゃんとされているのね。

有川：だから、参加した人も参加できなかった人も情報を共有できています。これは、とても良い形だなと思っています。

長江：「共有」ね。すごく重要なことですね。

池田：やはり議事録がないと、来られなかった人がわからないと思います。また、来た人でも何があったか忘れるじゃないですか。ですから、「思い出してくれたら良いな」と思うのと、「私もふりかえりたい」ということで、半分自分のためですね。(笑い)

長江：皆さんも議事録をチェックしていますか？

渡辺：やはり全ての会議に出席するのはなかなか難しいので、行けない時は議事録を見て「こういうことが決まったのだな」「ここまで進んだのだな」と確認をしています。

長江：「情報の場」があることで、情報を「共有」「確認」することができる場所が作られているのです。イベント企画がどんどん進んでいくと、学生同士の議論が煮詰まってきますよね。また、それを講師の方をお願いしなければならないじゃないですか。そして、この「ジュニア夢カレッジ」の講師の先生って、実は100%ボランティアです。本当に、善意でできあがっています。子ども達に、「こういう職業について教えてください」とか「関わって下さい」ということを、社会人をお願いしなければいけない。100%ボランティアですから、「お金に変えられない価値」を共感してもらわないと動いてくれません。私が一番驚いているのが、昨年も参加してくださっている講師の方から、「二度と受けない」と言う人がいるかなと思っていました。しかし、みなさんまたやってく

ださるのです。ありがたいことですね。

このイベントには、「プロから学ぶ」というキーワードがあると思いますが、社会人との打ち合わせで、プロからどんなところを教わりましたか？

渡辺：私は、昨年先輩達と一緒に、講師の方との打ち合わせを行いました。しかし、今年は副リーダーという立場になったため、打ち合わせをするメンバーの中には入っていません。

長江：マネジメントすごいですね。経験者側として、アドバイスをしているのです。

渡辺：アドバイスができれば良いなと思っているのですが、なかなか時間を合わせるのが難しいです。

長江：例えばなんですけど、昨年、交渉に行ったではないですか。その時、大人の人に対して「どうやって話したら良いのかな」とか「受け入れてもらえないのではないかな」といった不安はなかったですか？昨年は、どこへ頼みに行かれましたか？

渡辺：昨年私は「ピアニスト」の方と打ち合わせをし、当日は「キャビンアテンダント」を担当しました。「他の職業体験と違うな」と新鮮に思ったことは、ピアニストの方が「その職業の楽しさだけじゃなくて、実際に“音楽で食べていきたいという人はたくさんいるけれど、結局夢が叶わなくて、夢破れていく人もたくさんいる、現実はその簡単な世界ではない」ということもプロの立場として教えた」と打ち合わせでおっしゃっていたことです。

長江：佐々木さんは、昨年どんなところに頼みに行きましたか？

佐々木：私が昨年打ち合わせに行ったのは、新京成電鉄です。有川さんと一緒に、打ち合わせに参加させていただきました。その時、私は千葉出身ではないので、新京成電鉄ってあまり身近な会社ではなかったのですが、打ち合わせに参加させていただき、すごく身近な会社になりました。

最初は、「新京成電鉄って、こういうイベントに参加してくれるのか、すごいなー」と軽い気持ちで思っていました。しかし、実際に打ち合わせに行ったら、いろいろなプログラムを考えてくださっていたのです。しかも、「ただの職業体験ではなく、新京成電鉄の詳しい内容や、普段何気なく使っている中でも、『普段気かけないところを自分達はやっているよ』というアピールを含めて知ってもらいたい」とお話をされていたことに、とても感動しました。

長 江：新京成電鉄の裏側を見せてくれましたね。操車場とか構内アナウンスとかにも連れて行ってくれました。

佐々木：まさか、ここまでしてくれるとは思いませんでした。

長 江：私は、2両編成の頃から、新京成は利用しています。ローカルな鉄道ほど、逆に言えば熱い物をもっていますよね。

有 川：温かさがありますよね。

長 江：今泉さんは、社会人と交渉をしに行く体験はしましたか？

今 泉：まだ体験していません。

長 江：では、打ち合わせに行く時、「やだな、ちょっと大人の人に会うのが怖いな」と思うことはありますか？

今 泉：まず、交渉をしたことがないので、どうして良いかわからないというのが、やはり大きな不安です。また、今回初めて参加させていただく段階で、「管理栄養士担当」のリーダーになってしまったので。

長 江：すごいじゃないですか、いきなり。

今 泉：この前、名刺の渡し方を見せていただいたのですが、そういうのを見ると「自分でもちゃんとできるかな」という不安もあります。相手の方に、失礼のないようやらなきゃいけないと思うし。

長 江：今泉さんは、短大生ではないですか。そうすると、来年はもう就職活動をし、再来年にはもう社会人ですね。そういう意味では、名刺の渡し方なんていうのは、社会人基礎力を育てるのに、役立つのではないですか？

今 泉：私自身これを通して、「社会にでた時の為に役立つことを教えてもらっている」という感覚があります。また、女子大学ですから、男性と関わることも少なくなってしまったので、それがやはり大きいのかなと思っています。

長 江：そのキーワードっていうのがすごいですね、「女子大学だから」

今 泉：女子大学だからこそ、卒業した後をとっても心配されました、「大丈夫？」って言われたのですよ、私。(笑い)「話せる？」とか、すごく言われました。

長 江：でも、実は女性としてもものすごく活躍している人は、名門女子大学出身がアメリカでも圧倒的に多いです。クリントンさんも女子大学出身です。今回の企画・立案では、社会人と対面して、何かお願いをしにいかなければならないわけじゃないですか。今回、学生一人一人が目的の為に名刺を持っています。交渉したことがなくても学生とし

ての身分でも、社会人と同じです。

そこで、池田さんは昨年、交渉をしてみて、自分が想像していたものと違うところで、気づかされたことはありますか？

池 田：気づかされたとかそういう思いとかはありません。目の前のことしかできない人なので。相手がどうのこうのとかではなく、こちらとしては「伝える」ことが大事だと思います。

長 江：良い言葉ですね、「伝える」。

池 田：だから、「伝える」ことを精一杯して、「どうしたら相手はわかってもらえるだろうか」を考えて動きました。わからないことがあったら聞けば良いじゃないですか。当時は、そういう感じでやっていました。また、わからないと思ったら、メモをすれば良いじゃないですか。「とりあえず行こう」みたいな感じで。

長 江：でも、普通だったら「とりあえず行こう」だと、ちょっとトラウマになってしまい、明日に伸ばしてしまうこともあるじゃないですか。しかも、「当たって砕けろ」というのは意外と難しかったりします。ちょっと引いちゃう部分っていうのは、人間あるじゃないですか。

池 田：今年は、身近な大人のよいところを発見して、有川さん等大人スタッフの、素晴らしいところをどんどん吸収していきたいと思っています。今年は昨年よりも、ちょっと貪欲になりたいです。

長 江：参加する子どもたちに「こんなことを体験させてあげたい」や「自分がもし子ども達が体験するとしたら、こんなことを体験してほしい」等、何かメッセージはありますか？

池 田：そうですね、私は、その職業を知るきっかけになってほしいなと思っています。だから、「よかった」だけでなく、刺激になったら良いなと思っています。良い部分も悪い部分も知る、入口になれば良いなと思っています。そしてスタッフも、社会教育の領域に興味をもってくれる子がいたら嬉しいなと思っています。

長 江：実際にまちづくりや、地域社会と関わりながら学ぶわけですね。

池 田：そうですね。それが将来きっかけになったら嬉しいなと思っています。本当に入り口でしかないのですが、その入り口になれば良いかなと思っています。

長 江：渡辺さんはどうですか？

渡 辺：昨年から企画に関わっていて感じるのが、その職業を担当してくださる講師の方達も、普段は営利団体として活動している方達なのに、社会教育事業に対して凄く前向きに関わってくださっているということです。しかも私達よりもやる気になってくださるような方達がたくさんいました。きっと、ただのボランティアではなく、講師の方達も楽しみながら、何か得たいものや得る物があるのだと思います。

子ども達には、とにかく一緒に楽しんでたくさんのごことを吸収してほしいです。子どもが楽しんでくれば、親御さん達も「送り出してよかったな」と思ってくれると思います。

長 江：佐々木さんはどうですか？参加する子どもたちに、メッセージを送るとしたら。

佐々木：やはり、こういう企画に参加してくる子って、何かしら自分の思いをもっていると思います。私の場合は、小さい頃からずっとなりたい職業がありますが、そういう子ってなかなかいないと思います。子ども達は様々なものを見て、色んなものに憧れると思いますが、それを知る良いきっかけになると思います。ですから、このイベントに限らず、様々な物に興味を持ち、色んなものを知って帰ってもらいたいです。

また、職業体験だけではなく、「子どもたち同士の交流」「学生スタッフとの交流」「講師の方との交流」と、多くの交流ができるチャンスだと思います。私みたいに、内向的な子でも楽しめると思うので、良いきっかけ作りしてほしいなと思います。

長 江：きっかけ、入り口作りですね。今泉さんはどうですか？

今 泉：私は、子ども達に少しでも興味の幅を広げてもらえたらなと思っています。また、参加した子どもが大きくなった時、「こういうイベントの企画作りに参加してみたいな」と思ってもらえるような、そんな企画にできたら良いなと私は思っています。

長 江：有川さんは、最初皆さんと、「職」または「働く」ことに対しての導入部分をしっかり議論していましたね。

有 川：はい、今年はかなりそこに力を入れています。昨年は、フロンティアすることに精一杯で、「どうしてこの企画をやるの」とか、「そもそも『働く』っ

てどういうことなの」といった議論がほとんどできていませんでした。

なので、今年は、1時間半を3回位やって、自分達が「このイベント企画を通してどういう力を伸ばしたいのか」というところを、自分達で意見を出し、調査票を作ってもらいました。できあがったら、まず事前に調査をして、イベントが終わった後、再度調査し、自分がどのくらい伸びたのか可視化できるような仕組みにしようと思っています。やはり終わった後、「なんとなく楽しかったな」とか「なんとなく成長したような気がするけれど、自分はよくわからない」ではこのイベントを企画する意味がなくなってしまうからね。

長 江：さっき佐々木さんが、「小さい頃からなりたいもの」についてお話していただきましたが、池田さんは小学生の頃、どんなことを考えていましたか？

池 田：今も同じなのですが、ほぼ何も考えていません。

(笑い) その日を楽しく過ごしたいので。

今回の企画は、「このイベントに参加したい」といって、自分で申し込むじゃないですか。そういう子ども達の行動力はすごいなと思います。

長 江：当時、こういう職業体験イベントはありましたか？

池 田：ありませんでした。なので、少しうらやましいなと思います。また、「体験してみよう」という思いを行動に移せる力はすごいなと思います。尊敬しますね。

応募するのは親ですが、まず応募する際、子ども自身が参加するかしないか自分で決めると思うので。

長 江：なおかつ、体験したい職業もどれかにエントリーをしなくてはならない。

池 田：すごい意識が高いなと思います。そういう子ども達には、期待に応えてあげたいなと思っていますね。

長 江：今泉さんはどうですか？自分が小学校4年生だった時は。

今 泉：私は、「あれやってみたい」「これやってみたい」というものはあったのですが、言葉にしたり表したりすることが苦手な子だったので、いざ行動にうつすことはできませんでした。

長 江：この「ジュニア夢カレッジ」は、お仕事体験はできるけれど、組織化され、ビジネス化されているテーマパークとは違いますからね。そういう点では、聖徳らしさがあり、「子ども」をキーワードにした生涯学習の一環ですね。

さっき佐々木さんが、子どもの時からずっと一貫し

て変わらないその職業の思いとはなんですか？

佐々木：私は、小さい頃から絵本を読んでもらったことから、自分からたくさんの本を読むようになりました。外で遊ぶこともありましたが、いつも図書館に連れて行ってもらいました。学校に行っている時でも、自分が一番図書館に行ったと思います。これは、私にとって一番の誇りです。

そうしていくうちに、小学校2年生位の頃から「図書館の人になりたい」と思い始め、大人になった今でも、図書館で働きたいという思いは変わらず、どんどん大きくなっています。

長 江：そうすると、やはり子ども達が体験する上での職業選びって、相当真剣に選んでいるのでしょうか。昨年も真剣でした。

渡辺さんはどうですか？子どもの時、職業に対する思いはどうでしたか？

渡 辺：あまり、特定の職業に就きたいと思ったことはありませんでした。むしろ、小学校の時って「将来の夢」を書かされるじゃないですか。何を書いて良いかわからないし、考えるのもしんどくて。張り出されると、周りの目が気になっていました。「あの子、こんなこと書いている」と言われているのではないかと思っていました。なんでしょう、小学生位の時にある、「個性を出すのが恥ずかしい」みたいな。そういうことをとても気にしていたので、「自分がこれになりたい」とか「将来こういう風にしたい」という思いを恥ずかしがらず、それを誇れるような空気が作れたら良いなと思います。

長 江：そうですね。なおかつ、一人一人のプロが、自分が就いている職業を誇りに思っていなかったら語れませんからね。

有川さんからも、子どもたちに何かメッセージをどうぞ。

有 川：私は、少し違う側面から話をしようと思います。「ジュニア夢カレッジ」の特徴の一つに、プロの方々の質がとても高いことがあると思います。例えば、毎日新聞の文芸部長までされていた重里徹也先生や、日本で最初の女性パティシエである佐藤利枝子先生、さらには、「3分間クッキング」にでていらっしゃる小川聖子先生等、他にも誇りを持って仕事されている方ばかりです。「絶対に会えない人に会えるチャンス」というのが、「ジュニア夢カレッジ」の魅力ではないかなと思います。

プロとの関わりの中から、子ども達が、何か学ぶのはもちろんのこと、企画に参画している学生も、プロから多くのことを学びとってほしいなと思っています。

長 江：このイベントのキーワードとして、先程「プロから学ぶ」と言いました。「夢のカレッジ」すなわち「大学で夢を学ぶこと」「子ども達に思い出と誇りを持つこと」が、何よりも一番良かったのではないのでしょうか。昨年最後に、修了証書を子ども達に渡していましたよね。普通だったら、体験し終わったら帰ってしまうと思います。しかし、「実際に自分が体験した」という証明を持って帰りたいという子どもが沢山いました。そこに、迎えに来られた保護者から、「参加させてよかった」という顔をされていました。「自分の子どもが、途中で投げだしちゃうかもしれない」「職業体験をしっかりと最後までやり抜けるか」という不安を抱えながらも、帰ってきた子どもを見たら、頼もしい姿を見ることができた。

成果発表会で子ども達が発表していたじゃないですか。急に発表することになっても、今の子はちゃんと発表できるのです。ある面、すごくしっかりしているなとも思います。ですので、このような取組みは、今後とも期待に応えるようなものを提供していかなければならないなと感じますよね。実は、小さい頃に体験したことって全部残ります。ですので、みなさんも体験したことが経験になり、経験したことが社会人になった時に必ず役立ちます。ぜひ、このイベントを、最後までやり遂げてほしいです。

最後に、このイベントを通して、自分が得たいなと思うものはありますか？

池 田：人と関わることで得られるものは、良いところ悪いところ関わらず、全部吸収をしたいです。やはり、一人一人の個性にも良いところがあり、自分にはないものが沢山あるので、後輩だからと言わず、良いところを全部吸い取っていたら良いと思います。

佐々木：交流をしていく中で、自分にはないものを知る機会がとても多いです。それはとてもためになっていますし、先輩や後輩と関わる機会を持つことができます。今でも、同じ学部やコースの先輩、後輩のことも分からないですし、自分のクラスでさえも、ほとんど交流がない状況の中で生活して

います。ですので、学部や学科を越えて、先輩後輩と繋がるのは、本当に良いきっかけだなと思っています。そういうきっかけや交流作りって、社会に出ても通用すると思います。営業だけではなく、様々な場面で人と関わることがあるので。また、この企画を通して、講師の方が考えていることは、私たち企画した側として考えることと、同じところもあれば違うところもあります。プロの見方があるのを知ることができたので、いろんなことを吸収していきたいと思います。

渡 辺：私が在籍しているコースは人が少ないので、関わろうと思わなければ8人位との関わりだけで4年間過ごせてしまいます。しかしこの4年間をどう動くかで、人との関わりや、人脈の広がりが大きく変わると思います。私は、小学生の時に担任の先生に言われた「やらない後悔より、やった後悔のほうが良い」という言葉が心に残っています。やはり、失敗しても許される時期は学生の時しかないので、それだったら4年間いろんなことにチャレンジし、自分がこれから生きていくうえで糧にしていきたいということは、入学した時から思っていました。ですので、4年間を絶対有効に使いたいです。普段生活していくなかで、松戸市で働いている社会人や、様々な目標に向かって動いている先輩後輩とこんなに関わることってないと思うので、そういった意味でも、この企画に関わったことは経験として自分の中で活かされていくなと感じます。

今 泉：私は短大生なので、先輩たちと関わることもなく、自分のクラスだけで動いています。それでも、クラスの子全員の顔と名前が一致しない子がいる中、自分が2年でどう過ごすかがとても大きいなと思いました。もし、この企画に参加していなければ、先輩と話さずに終わってしまったのではないかと感じています。それを思うと、人との関わりって、とても大きいなと思いました。また、名刺の渡し方や、社会人との接し方を学んで、これから社会に出た時に役立てていきたいなと、心から思っています。

有 川：「自分が得られるもの」という視点では、あまり動いていません。「学生がどう変化するか」という視点で動いています。学生と関わっていく中で、特に、昨年から関わってくれている学生は、とても成長しているなと感じています。池田さんを例

にだすと、昨年に関して言えば、最初はちょっとフニャフニャしていました。しかし、「あなた副リーダーね」と告げた瞬間、目の輝きが変わりました。「役は人を作る」ではないですが、学生が様々な方向に向いているので、「どんな言葉がけをすれば学生は良い方に向くのかな」というのを、私としては知りたいと思って接しています。

長 江：経験者、初参加者関係なく、関わりを持ち視野を広げることは、人間が成長する上で、とても大きいことだと思います。また、「話すことがなかったら、この事業がなかったら、一生関わることはなかったら」ということは、とても大きいと思います。一歩関わることで、失敗を恐れなくて進むことも大事ですね。本番も頑張りましょう！これで、座談会を終了したいと思います。

(座談会実施日 2016年10月24日)